

キャッチフレーズを素直に信じる視聴者が多いことである。茨城大学でもこの番組を視聴した学生が少なくなく、「テレビを鵜呑みにするのは怖い」という感想を語ってくれた。

日本において、マヤ文明ほど誤解されている古代文明はないのかもしれない。こうした傾向は、中学高校の教科書において、マヤ文明をはじめとする先コロンブス期の南北アメリカ大陸の文化や歴史にかんする記述が、旧大陸のそれと比べてきわめて少ないことと無関係ではない。多くの日本人が、マヤ文明の知識を、テレビ番組を通じて得ている。テレビ番組は一過性のものであろうが、謎・不思議・神秘を誇張したマヤ文明観が繰り返して放送されれば、そうしたステレオ・タイプが定着してしまう。筆者は、本書の校正中と出版後に、TBSの「世界遺産」、NHKの「探検ロマン世界遺産」、NHKスペシャルの「マヤ文明」の番組制作担当者から、監修と資料提供の取材の依頼を受けた。その際に、「本書を予習してくれば」という条件付きで引き受けた。本書を実際に読む人は、数千人にしかすぎないであろう。しかし、本書が研究者や一般読者だけでなく、テレビ番組制作担当者や他のマス・メディア関係者にも読まれることによって、マヤ文明の学術研究と一般社会のもつ知識の乖離が狭まり、より客観的な新しいマヤ文明観が広がっていくことを期待したい。

新しいマヤ文明観を学ぶことは、紀元前からスペイン人の侵略までのマヤ文明にかんする知識を得るだけでなく、現代マヤ人の歴史・文化伝統やマヤ文明が興隆したラテンアメリカ諸国の文化・社会・歴史を理解するうえでも重要である。そして、旧大陸世界との交流なしに独自に発展した「石器の都市文明」であったマヤ文明を比較研究することによって、人類とは何か、文明とは何か、そして人間の社会や文化の共通

性と多様性について、さらに文明、都市、王権や初期国家の起源・発展・衰退をはじめとする文化変化理論および現代地球社会の諸問題解決の糸口について、旧大陸の社会あるいは西洋文明と接触後の社会の研究だけでは得られない人類学的知見を提供できるのである。

『太鼓歌に耳をかせ—カリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』(松籟社、2006年) △ 東京大学・石橋 純

本書は、博士学位請求論文(東京大学、2000年)にもとづき、これを全面的に改稿し、書き下ろしの章と節を加えて新しい書籍として編集しなおしたものである。

港町、パリオ、タンボール

本書の舞台となるのは、ベネズエラ随一の港町プエルトカベージョだ。この町の旧市街のはずれに位置するパリオ・サンミジャンに、10年以上通って蓄積した民族誌資料が、この本の素材となっている。かつて「ならずもの」の街区と呼ばれたサンミジャンの若者たちが、地域社会の「誇り」を追求し、「伝統文化」を復興し、草の根の「民主政治」を実践した、20年にわたる軌跡をたどった文化運動の年代記である。

サンミジャンは、スペイン語圏カリブの典型的なパリオ＝都市下層地区だ。パリオには、国内の農村部や国外から経済的機会を求めて移民たちが集い住む。そこは、一般に、貧困や犯罪など、都市の否定的なステレオタイプとともに想像される空間である。同時にパリオは、西欧近代の価値観とは一線を画した民衆文化が実践される場でもある。日々の暮らしのなかで、書きことばより話しことば、言語より身体、論理より感覚、型どおりのふるまいより当意即妙の



機転が、生彩を放つ——そのような流儀で人びとの絆が維持・更新される社会空間が、バリオなのだ。

サンミジャンは祭りの盛んなバリオとして知られてきた。ここでいう祭りとは、民衆カトリシズムの聖人祭や季節祭である。信仰実践としてもっとも重視されるのは、石膏の素朴な聖像としてかたどられた聖人への誓願、そしてタンボールの開催である。誓願は、病気快癒・商売繁盛など、現世利益を求めて行なわれるのが常である。願いが叶えられた際の最高の奉納とされているのが、タンボールの開催である。

本誌読者にはおなじみのとおり、タンボール (tambor) という言葉は、アフロカリブ文化の文脈では、楽器・リズム・歌・踊り・宴・祭りのすべてを包含する、幅ひろく奥が深い用語である。本格的なタンボールは、聖人祭の前日から当日未明にかけて、夜を徹して催される。

タンボールの一座は、十数名のお祭り男・お祭り女で編成される。歌自慢の音頭とそれに応える会集。ソロとコーラスが交互に歌いつくコール・アンド・レスポンスの流儀はアフリカの特徴といわれる。大小さまざまな太鼓を組みあわせ、二拍子と三拍子が同時進行するポリリズムによって、めくるめく即興演奏をくりひろげる太鼓手たち。歌と太鼓の複雑な歯車がぴったりとかみあえば、大きなうねりとなって何時間でも続く。タンボールは、赤々と燃えながら回転しつづける、祭りと宴の炉心なのだ。

タンボールの舞踊は、よそ者の感性に強烈なエロスを喚起する。事実、タンボールの現場は、若者にとって異性との出会いの場となり、ときに大人の男女の痴話喧嘩の舞台ともなる。しかし、異文化の見物人が性欲の発露とみまごう舞踊が、踊る当人にとっては、愛する家族の病氣快癒を願い全身全霊を傾けて祈り明かす「行」であるということも、またありうる。西欧近代的視点が「放埒」ととらえる身体性のうちに、どのような思いがこめられているかを知るためには、タンボールが織りなす意味の網目を解釈しつつ、踊り手と対話してみるしかない。

ベネズエラが OPEC の創立を主導し、石油ブームへの道をひた走った 1960 年代から 70 年代初頭。都市の拡張にともないサンミジャンは市街地に呑みこまれた。同時に、荒ぶるタンボールでその名を知られたサンミジャンの祭りは、衰退の途をたどることとなる。

「黒人」文化、伝統復興、まちづくり

1970 年代末、こうした状況を憂慮したひとりの男が立ちあがった。当時 30 歳、レスリングコーチを生業としていた男の名は、ヘルマン・ビジャヌエバ。屈強な体躯を持ち、歌と太鼓に

も秀でたピジャヌエバは、サンミジャンの「野郎ども」をしたがえて近在の祭りと宴を「荒らし」まわる若者集団の頭目だった。この男こそが、本書の主人公というべき存在である。

ヘルマン・ピジャヌエバと仲間たちは、非営利市民団体「サンミジャン民俗文化救済会」(通称・サンミジャン太鼓会)を組織し、たしかな目標とともに活動をはじめた。それは、かつて侮蔑された黒人文化の汚名を返上し、「暴力の街」のイメージを「民俗文化の息づく街」のそれに塗りかえる、というものだった。こうして旗あげされた文化運動の、20年にわたる軌跡が、本書のおもな題材だ。

「黒人文化の復権」は、ピジャヌエバたちが実際にスローガンとして掲げた言葉である。しかし、サンミジャンの地域文化復興活動は、単純に「黒人の」社会運動とはいえない。というのも、ベネズエラはラテンアメリカ有数の混血社会といわれるからだ。本書第一部第1章で詳述したとおり、この国に代々住む土地っ子は、みずからを「白人」でも「黒人」でもなく「混血」とみなしている。現代ベネズエラにはアフリカ人の子孫が数多く住んでいるものの、彼らは「アフリカ系人」として固有の歴史意識を共有してはいない。つまり、(北米にみられるような)「黒人」として結束する「人種・民族」集団は、ベネズエラには存在しないといえるのだ[石橋 2006 近刊]。自由身分の黒人たちが創建したといわれるサンミジャンにおいても、こんにちの住民の大多数は、みずからを「混血」であると考えている。では、サンミジャンの文化運動がかかげた「黒人文化の復権」とは、いったい何を意味するのか。サンミジャンの民族誌情報にもとづき、こうした問いを掘りさげたのが、本書の第二部である、

「親方石油」——地主国家の民主政治

ベネズエラは世界有数の産油国である。この国の輸出総額の7割以上は石油部門で占められている。ベネズエラの近代化は石油経済に依存してきた。政情不安で知られた20世紀後半のラテンアメリカにあって、石油で潤うベネズエラは、例外的に民主体制の安定が続いた。産油国というベネズエラの経済的条件は、この国の政治と社会をも特徴づける要因になっている。ある社会のあり方は、そこに暮らす個人の人生観や価値観と無縁ではない。ならば、ベネズエラの歴史・経済・政治・社会の大状況は、地域社会に住む人びとの日々の現実のなかに、どのように関与してきたのか? このような問いも、私の関心事である。民主政治や石油経済とは直接結びつかないようにみえる伝統的祝祭や文化復興運動のいとなみに着目し、サンミジャンという一地域社会の視点から、問題を考察する——こうしたことを試みたのが、本書・第三部の各章である。

支配の型や権力構造を分析することによって国家を類型化する試みは、政治学・歴史学・人類学などさまざまな学問分野でなされてきた。「夜警国家」「名望家国家」「劇場国家」など、多くのモデルが提唱されている。なかでも産油国であるベネズエラを分析するさいに有効なのは、「地主国家」という考えかただ[Coronil 1997]。石油産業が創出する不労所得に依存することによって、ベネズエラの指導者層は近代化を推進し、不労所得を国民に再配分することによってこの国の民主主義を安定させてきた。ベネズエラ型民主主義をひとことでまとめるなら、石油収入のばらまきによって成立した妥協にもとづく国民各層融和の民主協定ということができる[Rey 1989]。

このような社会体制において人びとに特徴的な政治行動のパターンは、利益分配と引き換えに投票を約束する^{クライエンテリズム}恩顧主義である。大統領を直接投票によって選出するベネズエラにあっては、国家元首を頂点として末端の選挙民にまでいたる巨大な利益連鎖のピラミッドが形成されることになる [Karl 1997]。たとえていうなら「親方石油」体質である。「わが街」のアフロ系文化の復興をめざして草の根民主主義を実践したサンミジャンの青年たちも、このようなベネズエラ的政治文化と無縁ではいらなかった。こうしたことの詳細について議論したのが、本書第三部である。

メイキング『太鼓歌……』

本書は三部構成・13の章からなる本文と巻末資料という体裁をとっている。おもな章の前に「前奏」、各部のつなぎに「間奏」と銘打った短いエッセーを付けた。「前奏」「間奏」では、調査のこぼれ話しや、私と現地の人びとのかかわり、そして本書執筆にいたる私の個人史など本文では触れないさまざまな話題を盛りこんだ。本編の〈ナビゲーション〉あるいは〈メイキング『太鼓歌……』〉といった読み物を読者に提供する趣向である。本文の「物語」がいったん完結した後、「後奏」において、2005年までの「後日談」を紹介した。

「後奏」ならびに第二部・第8章は、チャベス運動の起源とチャベス政権下ベネズエラの社会対立を理解するための概説書としても役立つように執筆した。反米、反グローバリズムを主張し、国際的に物議をかもし指導者チャベスが、大揺れに揺れた任期をまっとうし、再選に臨むのが本年である。日本の論壇においては、「ラテンアメリカ左翼の旗手」として熱い視線を注ぐ者から「悪魔の手先」として頭ごなしに否定す

る論者にいたるまで、とかくチャベス個人への関心ばかりが集中しているようである。その一方で、元クーデター首謀者が民主的選挙を経て大統領の座に就き、圧倒的支持を得ているのはなにゆえかという社会状況の深層については、専門家ですらじゅうぶんに議論していない。こうした状況に本書を通じて一石を投ずることができれば、と思っている

ラテンアメリカの「人種」や「民族」の問題にこだわる方々にとっては有益な、最新の理論的枠組みと民族誌資料を、第1章・6章・7章で扱った。カウンターカルチャーやフォークリヴァイヴァルといった運動に興味を持つ読者にとっては、第9章・10章が関心の対象となるだろう。第11章は大企業と地域住民との間に起こった環境をめぐる闘争の詳細な事例研究である。

民衆文化、民主政治、アイデンティティ構築、ポピュリズム、クライエンテリズム、左翼運動、アフロ系文化、文化の政治性といったキーワードが気になる読者には、ぜひ最初から最後までじっくりとこの本とおつきあいたい。

巻末資料と副産物

巻末資料には、本書の主人公ヘルマン・ビジャヌエバの「自伝」と、サンミジャンの祭りの民族誌的記述、そしてインタビュー協力者のリストを掲載した。

「ビジャヌエバ自伝」執筆にあたって私は、この魅力的な運動家に傾倒する一伝記ライター立場に徹し、ビジャヌエバ本人の校閲を経て最終稿を確定した。これは、研究者の立場から彼の思想や言説に批判を加えた本書本文の言説を相対化し、当事者の声を多少なりとも反映させようとする意図からである。

学術研究者は、文献資料の典拠や信頼性を厳

しく追求するけれども、口述資料の扱いについては(とくにわれわれ人類学者は)ぞんざいである。本書巻末の「インタビュー協力者一覧」では本書で証言を引用した人びとの略歴とポートレイトを掲載した。これは、それぞれの発言がどのような立場と経歴をもつ個人から発せられたかを明らかにするもくろみである。同時に、ビブリオグラフィに掲げることで先行研究の著者に表すのと同等の敬意を、インタビュー協力者にも表わそうという意図をこめた¹。

本書の本文中ではサンミジャンの祭りの由来や儀礼の次第について一貫した詳細な記述を提供することをあえてしなかった。たしかに、ルネサンス期ヨーロッパの民衆文化にまで遡って説き起こす読み物は興味深い。しかし、現地の人びとはそうした文化史的蘊蓄(うんちく)に定見も関心も持たない。つまり、この手の言説は現代の地域社会を生きる人びとの「誇り」や「自分らしさ」を物語る資源となっていないのである。祭りや儀礼の詳細を本文とは独立した巻末資料に収録したのはこのことを考慮しての帰結である。

一方、さまざまな出来事が同時多発する祭りの時間と空間は、そもそも単線的な論理的記述と相いれない要素に満ち満ちている。祭りの次第について精密に記述しようとすればするほど、その経験を共有したことの無い読者にとっては退屈な読み物になってしまう。詩人ならぬ私が書いた祭りの民族誌もそのような限界の内にあると自覚している。それゆえ、私は、本書の姉妹編として祭りを記録したドキュメンタリー映像作品を制作した。私のドキュメンタリー作品は、余業の域を出ないが、それでも文字による記録よりは雄弁にサンミジャンの祭りの実感を万人に伝える方が開けると考えている。本書

¹ 写真撮影時に、本書の意図を説明したうえで、写真と経歴の掲載に対する許可を取っている

とあわせてご覧いただければ幸いである²。

本書に掲載した約200点の写真は、私が現地の人びとと交流しながら撮影した日常と祭りの記録である。スペイン語圏カリブのバリオの生活の様子を伝えるドキュメンタリー写真が印刷媒体において発表されること自体、日本においては滅多にない機会である。私の写真術もまた素人芸にすぎないが、ご覧いただければ幸いである。

まだ見ぬ読者へ

プエルトカベージョという都市、バリオという生活空間とそこに生きる人びとの話題は、日本の研究者・学生諸氏にとって、なじみの薄いものであるに違いない。しかし、本書の物語は、地域文化の振興をライフワークとして定めた若者たちが、伝統文化を通じて住民の自尊心を構築する軌跡を描いたものだ。そして、その過程で彼らが文化と政治の節節する領域を生き、文化を通じて政治・社会・経済とかかわっていく経緯をあきらかにしたものである。1960年代から全世界を席捲した若者の異議申し立て運動(カウンターカルチャー)が、その後の歳月を経ていかに変容し、主流社会と折りあいをつけていったか——そのようないきさつをたどるための一事例でもある。こうした接点から読者の想像力を少しでも刺激できれば、書き手としては本望である。

家電メーカーの駐在員としてはじめてベネズエラの地に暮らし、民衆音楽の紹介に手を染め、そして今は人類学研究者としてこの国とかかわりつづける私が、「ベネズエラとはどんな国か」という問いに、さまざまな角度から答えようと格闘した集成が本書である。豊穡な祭宴のなか

² 石橋 純(監督・制作)『ハンモックの埋葬 ベネズエラ、サンミジャンの祭りと宴』。販売・株式会社ラティーナ(電話 03-5768-5588、メールアドレス latina@latina.co.jp) VHS 版、1800 円+税。DVD 版、2200 円+税。

でくりひろげられる民衆文化と、壮大な前衛演劇ともいえる政治経済の動きを、多様なエネルギーが即興的に織りなすポリリズムとして描くことを試みた。その tumba' o (スウィング) は読者にとって、どのように響くだろうか……。皆さんと対話を交わす機会が持てれば、私にとってこのうえないよろこびである。

参考文献

Coronil, Fernando. 1997. *The Magical State: Nature, Money, and Modernity in Venezuela*. The University of Chicago Press.

石橋 純 2000 「タンボールの政治性：ベネズエラ、サンミジャンにおける民衆文化・アイデンティティ・民主主義」東京大学 大学院総合文化研究科地域文化研究専攻提出 博士学位請求論文。

石橋 純 2006 (近刊予定) 「ベネズエラ：「混血」社会における「アフロ系民族」の創生」坂井 正人・鈴木紀・松本栄治編『新世界地理 第14巻 アメリカII—ラテンアメリカ』朝倉書店。

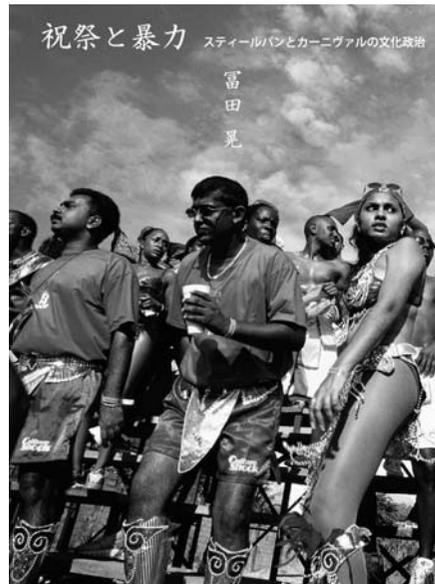
Karl, Terry Lynn. 1997. *The Paradox of Plenty: Oil Booms and Petro States*. University of California Press.

Rey, Juan Carlos. 1989. *El futuro de la democracia en Venezuela*. IDEA.

『祝祭と暴力：スティールパンとカーニヴァルの文化政治』（二宮書店、2005年、体裁：B6判 192p、口絵カラー 32p、附録 DVD-Video:24分 11秒）△ 弘前大学教育学部・富田 晃

カリブ～ニューヨーク～日本、地球規模で移動するスティールパンとカーニヴァルのカルチュラル・ポリティクス。

序章 祝祭と暴力：スティールパンとカーニヴァル



の文化政治

§スティールパン：その発祥と移動 §カーニヴァルとカーニヴァル性 §カリブ海地域と暴力 §トリニダード島：複層する二項対立 §ニューヨーク：グローバル都市のローカリズムと超大国イデオロギー §ブルックリン §カーニヴァルとクラウンハイツ暴動 §九. 一 §本書の構成

1章 カーニヴァル：陶酔と熱狂のトリニダード §カリブソノソカ §マス/マスカレード §<コラム> オールド・マスとキッディー・カーニヴァル §スティールパン/スティールバンド §<コラム> ジュヴェ

2章 スティールバンド・ムーヴメント §太鼓から竹棒へ、そしてブリキ缶へ：スティールパン誕生前史 §スティールパンの生みの親たち：楽器制作者、作編曲家、バンドリーダーとして §トリニダード・トバゴの「国民楽器」：世界の近代史を刻みこんで §<コラム> パン・アラウンド・ザ・ワールド §<コラム> スティールパンにはまるための実践講座

3章 黒人大学留学日記

§全ては同じ「アフリカ」というイメージのもとに §「聖なる演劇」の聴衆約30人。空回るメッセージ §「本物のアフリカ」に向け披露されたアフリカン・ドラマ&ダンス §現代文明の起源にアフリカありき？ 壮大なる「黒人神話」 §奴隷交易の歴史を胸に刻む：ミドル・パッセージ・セレモニー §大学側の理念、学生の現実をみる目、「人種」という暴力